



芭蕉句解
春夏



序

俳諧のふは古今よりあつた。我門の
古人かしく着被しんく知なく句の中は作謡を
参し俳祖を世に傳へり志は傳へ先賢
三傳りくくやむもわが教へ何れも言才十子
その外法に傳りしあやむが教へもくは
されも事處も桃橘のり門人し其角嵐高は
とそりといは深淺厚薄意味深長乃秘妙は
このあやむ志しし説多ひしやるも志し
今翁乃句し人志秘契し功なりしは記實

同解序

信

お討神用曲箭字眼玄妙乃法能 風流の中紙
中てく末にそく只く其試といふ名ありぬ
そのまじりありし言をゆり類多し 如今雪中居
藝古は先作風流の正統吏登花樹高才にて
別風変て忘印を附屬し 高つ乃奉まら
波を樹、白風と志とあて芽をく 星雲十と其
こころをそ乃年月訪ひ身が好士に言法を好
ふれ時を法もくか法をたつ孫は試すその眼ふ
ゆ柳の政能乃何る所と本尚のあふく梅の
まふく柳く、凡果の事をたつる本習乃山

家の楳乃虫よ若くその山たりいふ奥はの
うしゆゆやく燃らふ代治りある松風もつそく
富士山を志ると凡果の事をたつる本習乃山
おとしいり又古き宮寺は徳と、寛平延 延
むしゆゆ志のいわく、仮寐の睡るなるとく酒を打
女の唄ふをやゆあいて世と此里の事あつらも
かく中く想像し又古城砦の形御りく田畑乃
中に古墓若むし 古戰場乃何るをぬい、何るを
唄く捨人の身もかく治る御代の事あり
あつとる治りしかく其時く、其時すし、其時

か解

山

翁乃生涯、西行宇沢の如き喜ひ喜は系
さくさく笑み、ねらに夷狄と花も曉より
まじいまらみ人の何れもやまに、時を
時乃の親戚は、秋の月、かゝんはま
れ、く人を休の飄乃、いろく、船の影、く、海を
鵜鶴ら、は、又、高、は、ゆり、た、ん、時、を、く、末、世、の、人
く、乃、も、紀、を、録、ぬ、え、く、高、き、自、を、し、一、え、あ、る、今、
う、つ、も、ゆ、く、た、お、も、む、く、誠、志、の、く、か、く、こ、り
氏家の、く、く、身、を、海、を、い、れ、い、その、御、ま、入、り
不、く、く、これ、衆、の、お、く、く、も、く、乃、も、ん、う、い、を、ゆ

事、く、書、の、山、の、く、て、林、藤、の、ち、ん、ち、り
あ、る、く、や、ま、く、一、百、白、ま、た、り、り、の、く、書
う、く、く、母、も、お、お、く、又、の、ち、は、世、乃、お、上、る
ま、ま、の、く、く、ん、く、ま、は、に、く、く、く、か、く、
と、ま、れ、い、せ、く、く、く、の、ま、は、あ、る、

楚水

芭蕉翁句解

高申房巻を述

芭蕉翁の句を評す

意法和の平に けまといせおまの人言伝と便
うまうまの梅子くれ世縁より作るけみ文字の常此
人と元日と無き成芭蕉翁の形家母れり例の
風雲よりと 柀子種かち案乃らう海いも柀か
此世の恭且よい世の初便より 一文字を境を解
一字は減する

年くや猿くも年くも猿の句

柿より六窓一椀猿の句も色る猿只人の句は彼よりつりもよき事と生死を事乃の理をいふ事いふも猿にまれば昔昔のやうもむとむいふ事いふこと乃を猿の理想より急惠と師七猿の和歌より

はくくは世の中と思ふもまらるるを海ら如ん
足きそいふ事も時いふもあはれ世にまらるるいふ
はくもあくいふ事もいふ事いふ事いふ事いふ事
いふもいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

すいせの中もあはれ猿もきそあはれも
いふはあはれもあはれも人の句をいふ事いふ事
見もきそいふ事もいふ事いふ事いふ事
或人云芭蕉翁生辰 後光明院乃御宇正保元年甲申
俗と世今わるといふ理あはれもあはれも又許前信
又選直指の句も祖翁曰予、南岳止猿の句は猿いふ事
の句あはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

誰やうのあはれもあはれもあはれも

大治長宗は松よりあはれもあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

冠優絶の姿は思ひ合ふ新紅或書に紅杏此
相と秋風吹くしに声おぼゆる仲はきく流俊成卿亦の作
称一河ふの詞は雲は八旬有余れ志存白髪多る論志
帽子紫檀の昔し中し布皮を松下の巖に安くと嘯き
をりて和琴はわかきあせむる室に紅風おりく喜信
かゝる夕暮とらん地まじと略只くちかたのし
かちかたせり

誰人、蘇るくまに花のそは

孫辰字元公家貧織席為業明詩書而京兆

功曹冬月無被有藁一束暮卧朝收

似今一也 新年 瓢 亦 亦 味

涪門芭蕉庵了亦亦味々りりる瓢何り糖をむく
きる門人号又是よるるい言俗宗の系と稱す
瓢銘山素堂 一瓢重黛山自笑称箕山莫慣
首陽餓這中飯顆山

乞の印し門瓢と稱す我世の邪

乞よ瓢瓢の文何り暗く今在哉何果る家の跡

花あり又或集りー 子ありや新道ゆりき
お株 年き月や新道ありー 新道ゆりき
おのゆりき

子良館の後子柳ゆりきー

湧子良子ゆりきー 柳の集

おりー子と信言ありーと 湧子良子ゆりき
を神宮の神饌と奉仕せしむる女ありきと
布くありきあり子良乃館ゆりき凡て新道
柳希ありき世今ゆりき

お先若菜ゆり子良のまゆけ

世一帯ハし川大津より東の儀判あり柳若菜ハ
まゆ乃色立しーとなくの風流さしーのまゆを
こりーと又まゆけとまゆの魂して駕昇お女の
まゆにまゆまゆーに覇後乃一棒やまゆー
けのまゆ切
口受

らんまゆくにまゆハ若菜ゆり

拾遺おの名ハ 柳若菜ゆりきまゆゆりきまゆゆりき

く編み一若葉つむく青つらさきなりこるやくぬ
めんく菟菟のま入すくあは細て若葉捕むと
かりさわい菟菟乃初春りふふまこうかた抑合ふ
ふく一ふ吉初春の粉骨称ま

常く以て端く一眠るは傍たある

庄子齊物論曰昔者莊周夢為胡蝶相然胡蝶也け
く海に居るは蛇垣穂の柳乃眠るあはく糸たねる
白日に依者皆如蝶のまふ思ひあ(ま)は若葉捕む
ふく波故事く一あはに比るまままらまの

庄子なうく

これまのく柳はさる志あるくね

けく許六く字陀法作。それりのまさり柳のまふ日
とまらまははの短冊と正のまら信集におせるふり
柳のさるあは(ま)は信りく記をま柳まらまさる柳
と(ま)は初の葉く一く柳乃さるは例に再葉の粉骨と
んまらり世の法玉連環体受て詩字連環く(ま)は
尔葉ま(ま)は(ま)は一東坡喜禅集寄門静思甲久隔
帰期憶別離時聞漏轉これ連環のつ(ま)は(ま)は

同解上

(五)

大日枝やーと引掛ー一處

一休福原叡山は好いたまひし時飛徒等太字成
中こゝろ福原坂本は里へけと紙と結せし一の
まよ引掛るひし

二月廿日神路山を廻りて

深きはよし衣文長し何しるか

大向の増賀の信を憑むし一石の古所りけ上人乃らの
思ひ深く伊勢を神文は事終りわると名刺と終りしもの

お現とあがりたよひ小神衣皆乞食しし上院ふそそ深
よて下向し多しとらと撰集抄に記されしと珍なり
名刺多しとらよし二月の嵐しし其後とよらる世の
深き又よし

二月堂よ籠りて

あまのやーお乃信ら皆のあや

け白水多し書し冬の節よ介ら集りり二月をに
あまのよし羽子よか多しはけり信二月節より七日よ
あまのけ日堂宗の石井よ若校は進敷大明神より報世

音人跡をしのびたゞし水浦も別れを及て靈符試す
これに二月をわねたといふ

言吐

又母乃志きりに恋し娘子の夢

良無惜取の物よ 何れくとも山田の娘子の夢
又もわんせぬもあはれし世にわんせ

牌呂丸

面帰より何れい塚乃 昔も

る丸い出ぬぬ忌の禁人かりぬの強尾よ付て一夜
武いの源川は仮寐し其後華洛乃桃も坊は年以紙て
夜文もれ秘旅中なりと黄泉の客もなりけりよふ
面帰ハ唐の孟遷詩に蘇蘇亦是王孫草 莫送春香
入客衣^{蘇蘇}蘇蘇一各當帰此二字當帰と讀む夫の梅よ
め久し書けりふ国情の起り詩也定れ面由の二字を
摘とのりし又楚辞九歌曰 悲莫悲兮生別離 樂
莫樂兮新相知 この久し梅と生を當帰乃とん程
かかきよふかんとて此詞もよきものなり又夜とつふ
夕暮なりし皇州の塚は行し心はせむるありし

老慵

蛸くろく海老をたれ巻もせとく

山家集の雑の部上中に一たつ物を高ひりくは
何とて同いかに蛤と干てゆり多るも一りりいすく
おあしく、蛸ともさ一多干もさき蛤よりい存り
便りりいししは蛸くろく海老の旨もわれをいすき
管のまふかしくは蛸くろく海老の旨もわれをいすき
すは一皮もさあやと蛸くろく海老の旨もわれをいすき
くもいりり

高城山の麓をさる

杉尾くろく海老くろく海老の旨

岩橋の表は岩くろく海老くろく海老の旨
岩橋くろく海老の旨は岩くろく海老の旨
かくまはくろく海老の旨は岩くろく海老の旨
くろく海老の旨は岩くろく海老の旨

向榮院もねくろく海老くろく海老の旨

死ねんきくろく海老くろく海老の旨

此等の詞を擧ぐりて當院の清風ありはれども、
花よよとて日本の威風も白中にありたる

ちる花や、多も驚く、琴の塵

是ハ紫雲の画賛あり、劉向別録曰、魯有善歌者、虞
公發聲、清哀拂動、梁上塵、このふは、
琴と花を、
支考、陸奥へりたる

けし、
世よ、
一具

春のや、
秋早世の中、
我も食せし
と、
一

よ、
一

秋よ、
佛を、
一
一
一

布袋の賛

このほくや袋けらの月と紙

鳥丸光唐所著葉集拾月布袋此讚よ大直と
さしたる指の先くも月高花も枯乃おぼふ白雲と
けきよかきして正を後の深味とくしと

かきゆめや葉胡の原れ為らぬと

葉胡の原地名とさくし誦士多し葉胡は葉系に河原葉
胡のよわきも只んさくしある葉胡の眼元神あり

湖水

り青い池のくしかーみえ

お石寺の奥に住居とまきせのほろけ門人きとまき
情の湖水の眺望や世々と情こりりかせら葉あり
一夕の情うらしいまわらまはるるまきこりけね
何と一照るまきとまき

せくまう初方浦まで追きまり

花をねよまの吉原にふさりまはゆるあつくおん

この銘を惜しむる一物に和音の海と山色遠合堂
海明先見且瞻望一々むは清の瑞巖清くまを
情むくこの地ありたわぬ追牛なりはしそちる有りて
浦山の風色よえさとりせしるおもをぬるありて

いせと

神垣やみいしけも垣繋像

今葉集 神垣の向よりとるや夕そすもれいし
しけぬ花乃まぶしくはふよかふいと無常
迅速の句情係一

あしきんむ月、梅乃花伝り

袖見紀よきけ句伝集一花さうりしむせうきてい人の
束縛しり昨の春風やうせうと花さうりしむせうきてい人の
親色一とくじつきのあめい山家集よ 海音るね
梅より花伝り梅よまうりしむせうきてい人の
うあつ?

ほしあすもやめ人のわやめ

郭云は月しりやめあわめしりやめあわめしりや

初集

二

御よりわらわちあはれむしはるる御後にはり御令し
み人の二宮の御月の御心ありとまはるる御心は
のりりききとらん一乃因は御の御とみ人のか
ゆは御しん御に御一いい御事あり

奥羽武隈様より

檜より ねとに 申候二月紙

奥羽乃と御より、元禄二年御生未七日武隈と
まきく御月より一の武隈より御心御より二月
紙一とのりねとまきく、及御心は御と一御長達し御心

御心よりわらわちあはれむしはるる御後にはり御令し
み人の二宮の御月の御心ありとまはるる御心は
のりりききとらん一乃因は御の御とみ人のか
ゆは御しん御に御一いい御事あり

御心よりわらわちあはれむしはるる御後にはり御令し

御心よりわらわちあはれむしはるる御後にはり御令し
み人の二宮の御月の御心ありとまはるる御心は
のりりききとらん一乃因は御の御とみ人のか
ゆは御しん御に御一いい御事あり

御心より

御心より

とくせたるものなり

評六々本多路の送る

諸人乃こそあしむに推の花

万葉集に 家にわねをけりぬを多岐路にゆき
推のともりの馬をせ給ふをせり挽麻ふり
風雅の細ととたりと人となすなり

竹碎日

ふくもし竹種のみいふ

五雜俎曰 栽竹無時雨過便移須留宿
七記取南枝此妙訣也 俗説四月十日と竹碎
日と云ふといふ俗説に依りて五月十日又
居家必用 五月十八日栽竹及十三日為竹本
余日栽之百無一死頻試實効竹入るる
其の都合よくすといふ風俗なり

古き世説志のひき

表のちから松子けり大楠か

けりいふ松子元くす松子大楠か松子御ら

童子のしづくもるふれと冬の句とるる庵し
 古柳し 夕暮ゆる向 武宗のふれ 中野たつる
 からみきしこ又古柳は画する 藤氏書つる 雲のふれ 雲のふれ
 比とく物とえの書し 國者 梅と物とくし しみと 又おぼの
 雲乃 雲のつら 梅とみちし 伶人 ぬき書す 夜更し
 そと 杉書梅と 梅子のけ 合知くし 夕

象馬西行はらるし

夕くらしや梅はまろむ 梅の花

ゆり梅と象馬のしら申 満寺け入けを歌きて

ゆり 雲集し 象馬のしら 梅はまろむ 夕
 夕くらし 梅はまろむ

夏夕くらし 梅はまろむ 梅の花

一葉の雲集塔は或は 悠野語ふんま 夕くらし 漢名 石華
 とのく 葉集 夕言は 枝者よ 梅はまろむ 梅はまろむ 夕
 たふら 一葉集 夕言は 夕言は 夕言は 夕言は 夕言は 夕言は

雲乃 梅の花

雲乃 梅の花 夕くらし 梅はまろむ

廿乃とくあき、何り有んも芥子の口よきくゆふよ
 けりたあき、あき成治の筆た何氣かくあむい
 世はたけしふ白先教のくちあむく、名ありと
 けらるも撰集物中良の詩人榮田のき云柳せりたの
 今たしひりあきと皆筆くく、品若業れつて
 かくしてち歎とあきぬき、あきとくわくあきたの
 中とあきけくもあき、あきとくわくあきたの
 るくもくもあき、あきとくわくあきたの
 常に撰集物の題をきく、あきとくわくあきたの
 是等の題名とあき、あきとくわくあきたの

芦野より

田一枚くくをちる柳うか

芦野下野よあき、あきのよ清水流り、柳け
 ちり、あきとくわくあき、あきとくわくあき
 あきとくわくあき、あきとくわくあき
 あきとくわくあき、あきとくわくあき

たつて

出戸寺く、あき、あき、あき、あき、あき

弟も教書のついでに書寫し今程よく付物事
先達の師の此寺に入主の御こと伴あり一書
何事にも氏の人これ程のいゝつらゝおつり
はり書寫の月も書寫乃書と書とく書寫を
かぶるも書と書と書と書と書と書と書と

杜若のいゝつらゝおつり

何事にも書と書と書と書と書と書と書と
書と書と書と書と書と書と書と書と書と
書と書と書と書と書と書と書と書と書と
書と書と書と書と書と書と書と書と書と

何事にも書と書と書と書と書と書と書と
書と書と書と書と書と書と書と書と書と
書と書と書と書と書と書と書と書と書と
書と書と書と書と書と書と書と書と書と

山崎宗道四行

何事にも書と書と書と書と書と書と書と

宗道いゝつらゝおつり
いゝつらゝおつり
いゝつらゝおつり
いゝつらゝおつり

ひまわりをあらうと 家徳、海女をわめて織るついで
舟一ひかりのい 幸むまわるとなれば水も豊
かき海女はまゝあらうと 又家徳、昭信信と龍中
とて徳造傳ふらぬとれもさしは撰者か海女徳造の
月夜を病みし故志は海女の何の徳傳との照を
このかよりし海女のよははわらうと海女のさきさき
ゆきハ徳造家女とてきり風船をきせられは海
女に織るもさうりいせん

這出よ 明を、一、叶 暮の朝

奥伊豆のゆきをたははすその今へ雪の春
ふれしもなもしとわらへる春の念ひむし
眼帯仲らんとし暮の春はけくゆきと
物くもさかいやうとよなく嘘と念ふまきふられ
るいりやも 又藤原殿 坂中を、別の品あり

えりふ田とれ目とせきとく批
よく刃をまきと舞花とく垣根うね
了ら坊よて友はをゆきなりふられ

号也希能うーろ教乃其
松うー只古草と梅千成る色

秋風う吹渡乃山家とよ

梅多しーまのち新法ぬ中流

山里二万歳まーむあ乃まれ

春もやけしーふやのふ月と梅

梅うーたの山と白れ世ふ山流うふ

伴登の玉阿波乃在彩大佛とて

む六うー陽を鳥しーいー能う入

つまううや柴胡乃五の産とまう

何乃本れ等も志う次白いり

蝶のとよをりり野中能日新うふ

起うーくうう友やせんぬふ胡蝶

古池や嘘とひこむ水乃とと

高野のうら

父母乃頼平一ひ一誰かの
蛇くさつをきき一ひ一

伏見西岩寺信上人の

我衣平一平一子の桃乃常世
嘆く一平一桃乃中一平一物さ
橋うら一平一わひ一平一

本れも一平一付も縁もさ一平一
葉畑平一平一

草葉

あの一平一踏ら一平一
葉清も一平一乃一平一

草葉

山と日と一平一

二見の園をめぐりて

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

一里のうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

子平徳と人とのうさぎのうさぎ

丹波市と人とのうさぎのうさぎ

はたきと人とのうさぎのうさぎ

そのまてのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

一ツ孫くうくうくうくうくうくう

時をたぬくぬくぬくぬくぬくぬく

源平乃等能夫先王等也子親

此を孫の馬牽むるに海を渡る

あるを住み家掃くやややややや

一巻乃に二横くやややややや

ちかひくくく麻のうさぎのうさぎ

は白くあかたてくぬる

灌佛乃日ふらやれあふ草の子は

其角の母み七日遊る

卯能ふも母行ふ宿をすくゆら

うらふふやうた柳の及く

武府をせくちんく赴く川橋

かてくく送る来くて能ふ

乃白といふそのあし

妻は穂城をうらふつむ別れ

招提ちうて澄ま和あるの少翁を

あし法自れ育させ給ふよと
とひつたて

まゑくして此目のやめくひら

いふ家と奥の佛垣和あるの山居の夜を

本家も唐いやうく順なるあし

石の奥よりとてふ人乃佳於
きふ店あり幼信庵といふ清陰
聖潔乃佳地といふ也又勝を云ん
ゆき卯月のうゝ免入る

せんよむ推乃本あり夜本を
休めぬ新とて此後乃すとい
漢舎とせしむ也んを所とす
粽ゆふ片ふをさむいふ

露沾るに終る

乃月由り終る清集河乃す人

大井川水也く清田塚氏乃す
とて

さる終るを吹落せ大井川
眉掃と候しとふ乃す乳
也人といふ標や面能ふ名
すしとやと終る乃す

素門己白亭ふ日くらあうそ

やうせん蒸乃枝年一たうりやう

この境をいふはあういふはあう
乃事母也

かこはあま角うりやうは源磨あう

花の上漕とやうは一橋乃老木

西行法師乃祈念とのう次

夕を新和はらあうすむはあう

皆田新堂見

あうらうや形はあうそあう

船舟の通りあうはあうあう

杉うらうそやうはあうあう

名霧あうあうは白川乃関あう

あうあうあうあう

風あうあうあうあう皆田あう

志のつれ里のふらり石とて

よもとのふらりのやちいし志のつれ

鴻白塚年氏とて

直きすこしき葉なすかあすけ

明石夜泊

晴きあふらうたふあはつ其れ月

まふも

閑さや岩より志をいせふら

無常迅来

やうて死ぬる者一死ハ見くは坪の香

きつたあ風はうほりれお柏子

雲のさむいしりさつて月乃山

あふもさつてさむいしりさつて

あふらうたあつたあつたあつた

夕也やに丁舞はしき遊ひを村
 豆飯より米搗はしき衣あき
 祀り業はくもく人輪をせし
 鞠落りよきまをすし風の泥
 柳ころり行きのまきしし初志業
 ありまのまほるをくまきしきまは
 神ししはらにしきまは

なまふ人乃少神もいさや土用が
 六乃や歳もまきしあまはる
 古裕のまんの松はつう
 馬くくくし荆まはらむむる水
 衣衣未風はかりはくさ次
 所の皮むしと那の草まき跡
 衣まのあまのゆかたあま

五月五日あつて早稲上川
 流しつて家々白くして藤下らる
 五月五日あつて早稲上川
 流しつて家々白くして藤下らる
 五月五日あつて早稲上川
 流しつて家々白くして藤下らる

落柿舎

西江

ほろくくくくくくくくくくく

画

内裏殿人形て皇の山
 山落木く何処くゆ
 ひくくくくくくくくくくく

